

僚友を想う

その他のタイトル	Zur Erinnerung an meinen Kollegen
著者	丸山 三友
雑誌名	独逸文学
巻	32
ページ	ii-iii
発行年	1988-06-15
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018321

僚友を想う

丸 山 三 友

関西大学のドイツ文学科はなくてはならない大切な僚友お二人を同じ病魔に奪われた。56年秋には和田賀一郎さんを、そして昨年3月には新谷浩堆さんを。ともに未だ50代前半のお年であり、語学と文学、それぞれの分野に益々研究を深められ、学究としてさらに大成されるその途次に於て他界された。お二人を失ったことは学科にとって創設以来の最大の不幸であり、また最も深刻な打撃である。

お二人の遠逝はまた私個人にとっても悲しみの極みであった。思わぬ伴侶の急逝に遭って苦患の日々を過していた私を、和田さんは温かい友情で慰め励まして下さった。また新谷さんは細やかな配慮をもって私を支えて下さった。お二人の温情と俠気を私は終生忘れない。

42年以後この千里山でお仲間となられた新谷さんは、同じ大阪外語のドイツ語科に学んだ御縁もあってか、親しく交わって下さり、学科内の仕事もよく共にさせていただいた。いま思い出してもあの40年代の様々な用務、例えば新規の講師の依頼に苦勞した教養ドイツ語の時間割の作製、前後数年を要した故高尾国男教授のヘルダーリン論遺稿の整理と、この『独逸文学』に掲載のための夜おそくまでの独文合研での協同作業。また近くは阪神ドイツ文学会に幹事として出ていただいた新谷さんとの、わけでも夏期ドイツ語講座の準備運営のための密接な連携等々。そしてまた、いや過去20年の間の大小さまざま数限りない事柄が浮かんでくる。

新谷さんに接した人は先ずあの温和な外面に好意をもち、やがて緻密な

神経、鋭敏な洞察力の持ち主であることを識る。新谷さんはまた行き届いた思慮の持主である。新谷さんには男の優しさがある、また弱者への温かい労わりの心があるとは、いま記憶する何人かの人達の新谷評の一部であるが、まさに公私にわたり、陰に陽に私が救われたのもこのような新谷さんの美質のおかげであった。

この類いまれなとも言える新谷さんの心の優しさに負う所、私は実に多かった。私事ばかり述べることになるが、それまで家内に一切依存していた年度末のある要件を、新谷さんは進んで引き受け処理して下さった。しかも懇切丁寧な解説を加えながら。そして私はいくら詳しく教えられても、一向にその方法を習得できぬ劣悪な生徒であった。毎年その時期御迷惑をかけて本当に申し訳なかったが、半時間ばかりで終る要件のあとの歓談が実は私の楽しみで、お互いの仕事の話、大学のこと、また時には刀剣にふれ、古後藤の小柄や笄を前にして刀装の美を語り一少くとも新谷さんはそれを理解できるお人であった。図らずもそれが最後になった61年2月の折は、新谷さんは外語卒業後の御苦労や、健康のことも含めて御自身のことをいつになくしみじみと話されていた。

あの夜の新谷さんもまたいつまでも心に残る。

いずれは誰もが、去って逝かなければならない。だがそれにしても、新谷浩堆さん、あなたもまた、あまりにも旅立ちを急ぐひとりになりましたね。残された者にはまたひとつの悲しみを負いました。